

『三国遺事』に現れる夢

—その(1)—

曹 述 燮

『三国遺事』には、二十五箇条にわたる三十の説話が、話し¹⁾の展開のモチーフに“夢”を用いている。これは“夢”が当時の人々の普段の生活において密接に関与していたことを物語る。

この論文では当時の人々が“夢”をどのように認識していたかを尋ねてみたい。

1、他界との交通場（1）：神・霊

夢はこの世の人と天神・海神・山神等の神々との交わり²⁾の場、そして死者の霊との交わり³⁾の場として認識されている。

- 卷一「紀異」：「東扶余」——天帝（天神）
- 卷二「紀異」：「駕洛国記」——皇天上帝（天神）
- 卷二「紀異」：「真聖女大王・居陀知」——老人（海神）
- 卷五「感通」：「仙桃聖母随喜伝事」——山神
- 卷一「紀異」：「第四脱解王」——脱解王の霊
- 卷一「紀異」：「長春郎・罷郎」——長春郎・罷郎の霊
- 卷五「孝善」：「真定孝善双美」——真定法師の母の霊
- 卷五「孝善」：「大城孝二世父母」——熊の霊
- 卷五「感通」：「郁面碑念仏西昇」²⁾——老父

1)、天神との交わり²⁾の場

北扶余の王である解夫妻の宰相である阿蘭弗の夢に天帝が降り、「将来、ここに吾が子孫が国を建てるようにしたい。あなたは此処から退けなさい」と言った。東海の浜辺に迦葉原と名づける土地があり、土壌が肥えて豊かで国の都を建てるに足るところであった。阿蘭弗はそこに都を移すように王に勧めた。国号は東扶余である。（卷一「紀異」：「東扶余」）

ここで王は王妃とともに寝殿に入っていったが、（王妃が）静かに王に語って、「わたしは阿踰陀国の姫で、姓が許、名前は黄玉、年は十六です。本国におりました時、今年の五月中、

父王と皇后がわたしを見て、「私たちの夕べの夢に、揃って皇天上帝にまみえたが、(その皇天上帝は)、「駕洛国の初代の君主首露は天が下降させ王位に就かせたもので、これこそ神聖なものでただの人ではない。ただし新しく国家についたわけでまた配偶者が定まっていない。卿等は必ず姫を送りその配偶者にしなさい」と言い、その言葉を終えて天に昇られた。目が覚めた後も上帝の言葉はなお耳に残っている。あなたはこれからすぐ親と別れそこに向かって行きなさい」と言いました。わたしは蒸棗²⁾を尋ね海の果てに浮かび、蟠桃³⁾を尋ね天の果てに移りました。わたくしが敢えてむさぼり、あなたは近くにおります」と言った。王は答えて、「朕は生まれながらに聖なるもので、前もって姫が遠方から至ることを知っていたから、下臣の王妃を迎え入れるようにとの請願があってもそれに従わなかった。今や淑徳の女性が自ら至って、わたしはとても幸福である」と言った。遂に飲びをともにし、二晩と一日をすごした。(卷二「紀異」：「駕洛国記」)

以上の二箇条の説話はいずれも古代朝鮮の部族国家ができあがる時の神話として解釈されるもので、その部族国家の最高統帥者は普通の人間界の人間の子孫ではない天上界の天の子孫であるとする。このような説話の語られる主眼は、その国家の最高統帥者の位の権威、つまり“王位の権威”が天上に起源する神聖なものであることを明示することであるが、その際天帝は“夢”を借りて人間と交わりをなしている。卷一「紀異」：「東扶余」では、北扶余の土地が、将来、天の子孫が国を建てるように選ばれた区別された土地であることの知らせが、そして卷二「紀異」：「駕洛国記」では、阿踰陀国の姫が神聖な天の子孫の配偶者として迎えらるべき選別された人物であることの知らせが、それぞれ人の夢を通して告知されている。

2)、海神・山神との交わりの場合

夜、夢に老人がいて、(良貝)公に、「弓が上手な人を一人この島に留めておけば順風が得られよう」と言った。公は目が覚め、このことで左右に諮問し、「誰を留めればいいか」と聞いた。衆人は、「木簡五十片に私たちの名前を書き、水に沈ませ籤にすればよいでしょう」と言う。公はそれに従った。軍士に居陀知というものがいたが、彼の名が水中に沈んだ。そこでその人を留めると、すぐ順風が起り舟は滞ることなく進んだ。(卷二「紀異」：「真聖女大王・居陀知」)

真平王の代(新羅第二十六代：579-632)、智恵と名づく比丘尼がいて賢い行いが多かった。興安寺に住んでいて、仏殿を新しく修理しようとしたが力が微弱であった。夢に外貌がしなやかで美しく、珠や翡翠で髪を飾った一人の女の仙人があらわれ(彼女を)慰めて、「わたしは仙桃山の神母である。あなたが仏殿を修理しようとしていることを喜んで、黄金十斤を布施しそれを助けたい。わたしの座席の下から黄金を取って主尊の三像を飾り、

壁の上には五十三の仏⁴⁾、六類の聖衆⁵⁾、及び諸々の天神・五岳の神君を画き、春季・秋季の十日には広く善男善女を集め広く一切の靈物のために占察法会を設けることを法規としなさい」と言った。智恵はそれで驚いて目が覚め、信徒を率いて神祠の座席の下まで行き、黄金一百六十両を掘り得、それで仏殿の修理に着手し完成した。すべては神母の諭したことに依っており、その事績は残って法事は廃止された。(巻五「感通」：「仙桃聖母随喜仏事」)

以上の二箇条の説話はそれぞれ、普通の人間界の人間ではない海神が、そして山神が“夢”を借りて人間と交わりをなしている。巻二「紀異」：「真聖女大王・居陀知」では、真聖女大王代(新羅第五十一代：887-897)、使臣となって唐に向かう良貝公一行が、鵠島あたりで大波浪に見舞われ船を進めることができない。占いに従って島の神池に祭りをした夜、良貝公の夢に老人が現れ、「弓が上手な人を一人この島に留めておけば順風が得られよう」と言う。その老人の言葉通りにしたところ、果たしてすぐ順風が起こり、舟は滞ることなく進んだとある。ここで良貝公の夢の中に現れた老人がほかでもない海神であることは、その後の話の展開で明らかになる。すなわち、「(一人だけ島に残された)居陀知が心配そうに島に立っていると、突然老人がその池から出現し、「わたしは西海の神である。いつも一人の僧侶が日の出の時に天から降りて来て、陀羅尼を暗唱しこの池を三回巡る。するとわたしの夫婦と子孫は皆水上に浮かび、僧侶はわが子孫の肝臓を取り食い尽くす。今はただわたしたち夫婦と娘が一人残っているだけである。明朝また必ずや降りて来るだろうから、あなたは彼を射殺してください」と言った」とある。巻五「感通」：「仙桃聖母随喜仏事」では、興安寺に住んでいて、仏殿を新しく修理しようと願う比丘尼の智恵の夢に、一人の女の仙人が現れ、「わたしは仙桃山の神母である。あなたが仏殿を修理しようとしていることを喜んで、黄金十斤を布施しそれを助けたい。わたしの座席の下から黄金を取って主尊の三像を飾り、壁の上には五十三の仏、六類の聖衆、及び諸々の天神・五岳の神君を画き、春季・秋季の十日には広く善男善女を集め広く一切の靈物のために占察法会を設けることを法規としなさい」と慰めの声をかけているが、これはすなわち仙桃山の山神なのである。

3)、死者の霊との交わりの場合

一説には、「(脱解王が)死んでから二十七代目の文虎王(新羅第三十代：661-681)の代、調露二年庚辰(680)三月十五日辛酉の夜の太宗(新羅第二十九代：654-661：文虎王の誤り)の夢に、姿のはなはだ威猛な老人が現れ、「わたしは脱解である。愷川の丘からわたしの骨を掘り出し、塑像して吐含山に安置せよ」と言った。王はその言葉に従った」とある。(巻一「紀異」：「第四脱解王」)

以前、(新羅が)百済の兵士と黄山で戦う戦役で、長春郎と罷郎とが陣中で死んだ。後の百済を討った時、(彼らは)太宗(新羅第二十九代：654-661)の夢に現れ、「臣等は

昔、国のために身を捧げ、白骨になってからも国を保護しようと思いました。そのため軍行に随従し怠ることがありませんでした。しかし、唐の軍の総帥蘇定方の威嚇に圧迫され、人の後に逐われるだけです。どうか大王がわたしたちに少々の勢いを付け加えてくださいませ」と言った。大王はこれに驚きまた不思議に思い、二人の魂のために牟山亭で一日間お経を説き、また漢山州に壮義寺を創建することで冥府での助けとした。(巻一「紀異」：「長春郎・罷郎」)

(仏門に)居ること三年にして、母の訃音がついた。真定は円満安座し禪定⁶⁾に入り、七日後にやっと起きあがった。説明するものは、「追想と悲哀とが極致で、ほとんど堪えきることができない。そのために、禪定でそれを洗い流した」と言った。あるいは、「禪定で母の転生したところを観察した」と言った。あるいは、「これで実際に冥福を営んだ」と言った。禪定から出、そのことを義湘に報告した。義湘は門徒を率い小伯山の錐洞に行き、草を結んで庵をなし群三千人を集めた。九十日の日程で華嚴大典を講演し、門人の智通が講演につき、その枢要を取り集め兩巻の書物にした。「錐洞記」という名で世間に流通している。講演し終わるとその母は夢に現れ、「わたしはすでに天道に転生している」と言った。(巻五「孝善」：「真定孝善双美」)

(大城は)すでに壮年になってから狩猟を好んだ。ある日、(彼は)吐含山に登り一頭の熊を捕らえてから、山の下の方に村に宿泊した。夢に、熊が変じて鬼になり訴えて、「あなたは どうしてわたしを殺したのか。わたしが仕返しにあなたを殺して食ってやる」と言った。大城は恐怖の中で容赦を乞った。鬼は、「わたしのために仏寺を創建できるか」と聞く。大城はこれに誓って、「承知した」と答えた。目が覚めると汗が布団に浸みこんでいた。その後は原野のことをやめ、熊のためにその熊を捕らえた地に「長寿寺」を創建した。これによって心に感応したところがあり、悲願を篤く増した。(巻五「孝善」：「大城孝二世父母」)

以上の四箇条の説話はいずれも、普通の人間界の人間あるいは動物としての生命を終え死んだ死者の霊が、“夢”を借りて人間と交わりをなしている。巻一「紀異」：「第四脱解王」では、脱解王が死んでから二十七代目の文虎王の代、調露二年庚辰、三月十五日辛酉の夜、文虎王の夢に姿のはなはだ威猛な老人が現れ、「わたしは脱解である。愷川の丘からわたしの骨を取り出し、塑像して吐含山に安置せよ」と言い、王はその言葉に従ったとある。そして、巻一「紀異」：「長春郎・罷郎」では、百済の兵士と黄山で戦う戦役で死んだ長春郎と罷郎が、後の百済を討った時の太宗の夢に現れ、「臣等は昔、国のために身を捧げ、白骨になってからも国を保護しようと思いました。そのため軍行に随従し怠ることがありませんでした。しかし、唐の軍の総帥蘇定方の威嚇に圧迫され、人の後に逐われるだけです。どうか大王がわたしたちに少々の勢いを付け加えてくださいませ」と言い、大王は二人の魂のために

牟山亭で一日間お経を説き、また漢山州に「杜義寺」を創建することで冥府での助けとしたとする。また、巻五「孝善」：「真定孝善双美」では、貧しい家で妻も娶らないまま日雇い稼ぎをして寡婦の母親を精一杯奉養していた出家する前の法師真定。母の死後には仏門に入り仏学を学ぼうと志す。息子真定のそのような趣旨を知った母親は、母への孝養より自分の当今の志を成し遂げることが大事であると勧める。真定は母親のそのような意思に違うまいと、致し方なく晩年の母親一人を世俗に残したまま仏門に入る。それから三年、母の訃音がついた。その時の真定は円満安座し禪定に入り、七日後にやっと起きあがり、そのことを師である義湘に報告した。義湘は門徒を率い小伯山の錐洞に行き、群三千人を集め九十日の日程で華嚴大典を講演したが、その講演が終わった時、真定の母は真定の夢に現れ、「わたしはすでに天道に転生している」と言ったとする。巻五「孝善」：「大城孝二世父母」では、狩猟を好んだ大城が吐含山に登り一頭の熊を捕らえたその日の夜、夢の中でその熊が変じて鬼になり、「あなたは どうしてわたしを殺したのか。わたしが仕返しにあなたを殺して食べてやる」と訴え出る。大城は恐怖の中で容赦を乞い、鬼の願い通りに熊を捕らえた地に「長寿寺」を創建したとする。この種の説話は当然、この世の生命を終えた死者はそれで終わりと言うものではなく、あの世（冥府）での生活を継続するという思想が根底にあってこそ語られるものである。

4)、その他

大師の懐鏡がいて承宣の劉碩、小卿の李元長と一緒に（法王寺を）建てなすことを願い、懐鏡がみずから土木の仕事をした。始め材木を運搬する時、夢に老父が麻の靴・葛の靴を一足ずつくれた。（巻五「感通」：「郁面碑念仏西昇」2）

以上に取り上げられた一箇条の説話は、“夢”を借りて人間と交わりをなしているものが“老父”と示されるだけで、説話中に登場するこの老父がどのような存在であるか、この説話だけでは具体的に知る余地がない。しかし、『三国遺事』に記載されている夢モチーフの説話中にはしばしば老人が登場しており、それらの説話中の老人の正体を確認することで、この説話中の老人の得体を類推してみることはできるであろう。

第一、海神や山神が老人の姿で現れる。上で取り上げられている巻二「紀異」：「真聖女大王・居陀知」で、良貝公の夢の中に現れた老人がほかでもない海神であることは確かめたとおりであり、巻三「塔像」：「弥勒仙花・未戸郎・真慈師」では、興輪寺の僧である真慈が弥勒像の前で、「弥勒が花郎に化身し現世に出現しますように」と願掛けをし、その弥勒仙花に会える希望で熊川の水源寺の南の千山の麓に行く。その時山の霊が老人に変身し出迎え、「ここに来たのは何の用で」と尋ね、「弥勒仙花に会いたいです」と答える真慈に、「しばらく前、水源寺の門外で弥勒仙花とすでに会っておいて、さらに何を求めに来たのだ」と諭す。それを聞いて真慈は驚き、汗をかきながら水源寺に飛んで帰ったとある。ここにお

いての老人はすなわち山神の現れなのである。

第二、死人の霊が老人の姿で現れる。同じく上で取り上げられている巻一「紀異」：「第四脱解王」で、文虎王の夢にはなはだ姿の威猛な老人が現れているが、「わたしは脱解である。愷川の丘からわたしの骨を掘り出し、塑像し吐舎山に安置せよ」と言い、王はその言葉に従ったとある。これは死人の霊が老人の姿で現れていることの例である。異常な死に型をした人は別であるが、男女を問わない諸々の人間の死を迎える時の普通の姿が老人であることを考える時、死人の霊が老人の姿で現れることはとても自然なものとして受け止められよう。

さて、ここで巻五「感通」：「郁面碑念仏西昇」2の説話中に現れている“老父”のことであるが、それは多分“死人の霊”つまり“死んだ貴珍の霊”が老人の姿で現れているように見られる。と言うのは、阿干の貴珍の家の郁面という名の下女が夢に感応して道心を起こし、主人について寺に往き庭先で念仏をし出してからもう九年。乙未年正月二十一日、郁面は礼仏の途中で寺の梁を突き抜け去っていったとする。郁面が去った後、貴珍は自分の家が異人の転生した土地であるとのことで、それを喜捨し「法王寺」とした。歳月が流れた後、その寺は荒廃になったので、大師の懐鏡が承宣の劉碩・小卿の李元長と一緒に建てなおすことを願う。懐鏡がみずから土木の仕事をし始め材木を運搬する時、彼の夢に現れ麻の靴・葛の靴を一足ずつくれたのが老父。そして、五年に渡る寺の修理を終え、その寺が再び大勢の奴婢を抱えた東南の名伽藍となった時、人々は懐鏡が貴珍の後身であると考えたとする。説話のこのような流れから、懐鏡の夢に現れた老父は“死んだ貴珍の霊”と解釈して無理がないのであろう。さらに、死人の霊が老人の姿で現れる前例があることを考えあわせると、巻五「感通」：「郁面碑念仏西昇」2の説話を普通の人間界の人間あるいは動物としての生命を終え死んでいった死者の霊が、“夢”を借りて人間と交わりをなしている説話の類と扱って差し支えないものとする。

2、他界との交通場（2）：仏教の神々

上での、夢はこの世の人と天神・海神・山神等の神々との交わり場、そして死者の霊との交わり場として認識されていたことに準ずるものとして、夢はこの世の人と仏教の神々との交わり場として認識されている。

巻三「塔像」：「南白月二聖：努朕夫得・怛怛朴朴」——白毫⁷⁾

巻三「塔像」：「三所観音・衆生寺」1——観音菩薩

巻三「塔像」：「三所観音・衆生寺」2——大聖（観音菩薩）

巻三「塔像」：「台山五万真身」——大聖（文殊菩薩）

巻四「義解」：「慈蔵定律」3——曼殊菩薩

巻三「塔像」：「蓋蔵寺弥陀殿」——真人⁸⁾

卷四「義解」：「慈藏定律」2——天人⁹⁾

卷三「塔像」：「生義寺石弥勒」——僧侶（石弥勒像）

卷三「塔像」：「洛山二大聖：観音・正趣、調信」1——僧侶（石仏：正趣菩薩像）

卷三「塔像」：「弥勒仙花・未尸郎・真慈師」——僧侶

1)、仏との交わりの場合

（努朕夫得と怛怛朴朴は）遂に俗世間を棄て去り、ちょうど深い谷間に隠れようとした。その夜、白毫の光が西から来、光の中から金色の腕が垂れ下がり二人の頭をなでた。目が覚め夢を語るが、二人がぴったり同じであった。しばらくの間ともに感動していたが、ついに白月山の無等谷に入っていった。朴朴師は北の嶺の獅子岩を占拠し、板小屋八尺の部屋をつくり住んだから「板房」と言う。夫得師は東の嶺の大きな石積みの中の水のあるところを占拠し、方丈を完成して住居としたから「磊房」と言う。（卷三「塔像」：「南白月二聖：努朕夫得・怛怛朴朴」）

以上の説話では、仏教での主神と数えられる仏が、その持っている三十二相の中の一相である白毫の相で“夢”を借りて人間と交わりをなしている。白毫の光とは、仏の額から発せられる光で無量の国土を照らすというもの。すなわち仏の身体の一部であると同時に、仏自身なのである。

2)、観音菩薩・文殊菩薩との交わりの場合

皇帝が、「彼が賢く正直であるならば、朕の昨日の夢の形状を描いて進上し、それに間違いがないなら許してあげよう」と言った。その人はそこで十一面の観音像を描いて進呈した。夢と符合してから、皇帝はやっと意味を理解して彼を赦免した。（卷三「塔像」：「三所観音・衆生寺」1）

この日、（衆生寺の僧侶の性泰が）しばらくうとうとしていると、夢に大聖が、「師はしばらくとどまり遠く離れないように。わたしが縁化を行かせ齋の費用をあてがうから」と言った。僧は嬉しくもあり感動し、遂に離れて行かずとどまった。それから十三日、突然二人が牛馬に荷物を積んで門前に来た。寺の僧が出ていき、何処から来たかを尋ねると、「私たちは金州地方の人です。何日前、一人の比丘がわたしの所に来、「わたしは東京の衆生寺に住んで長いものです。四事¹⁰⁾の困難で、縁化がここに来たのであります」と言いました。それで周りの皆から布施を集め、米六碩と塩四碩を得、それを載せてきたわけです」と言った。僧は、「この寺には縁化という人はいません。あなた達はおそらく聞き間違えたのでしょうか」と答えた。その人は、「先まで比丘がわたしたちを率いて来て、この師の見ていた井戸辺について、「寺の距離は近い。わたしは先に行ってお待ちしましょう」と言いました。私たち

はそれについて来たまでです」と言う。寺の僧が法堂の前に案内して入ると、その人は大聖を見上げ礼拝し、お互いに、「これは縁化比丘の像である」と言い驚き感嘆してやまない。このことで納められる米と塩は年々やむことがなかった。

(卷三「塔像」：「三所観音・衆生寺」2)

始め(慈蔵)法師が中国の五台山の文殊菩薩の真身に会おうとし、善徳女王(新羅第二十七代：632-647)の代、貞観十年丙申年(636)に唐に入った。まず中国の太和池の縁の石の文殊菩薩のところにつき七日間敬虔に祈ると、突然夢に大聖が四句の一偈¹⁾を受け、目が覚めても記憶できなかったが、しかし皆梵語で茫然とし解読できなかった。翌朝、突然一僧侶が緋羅(赤い絹)に金色の点のある袈裟一枚と仏鉢一個と仏頭骨一片とを持って師の側に来、「何のために心配しているのか」と聞く。師は夢の中で受け取った四句の偈が梵音で、解読し意味を解くことができないことを答えた。僧侶はこれを翻訳し、「呵囉婆佐囊、これは一切の法を了解することをいい、達嚩哆佉呼、これは本来の性質が執着のないことをいい、囊伽呬伽囊、これはこのように法と性質を解釈することをいい、達嚩盧舎那、これは即時盧舎那仏に会うことをいう」と言った。ここで持ってきた袈裟等を手渡し依頼して、「これは本師である釈迦世尊の道具である。あなたはよく護持するように」と言った。また、「あなたの本国の北東の方角の溟州の地域に五台山があり、一万の文殊菩薩がいつもそこに住んでいる。あなたは帰っていきそれに会いなさい」と言い、言葉が終わってから見えなくなった。(卷三「塔像」：「台山五万真身」)

慈蔵は自分が辺鄙な国に生まれたことを嘆き、西へ大きく教化を求めようとした。それで仁平三年丙申(636)詔を受け、門人の僧侶貫など十数人と西の唐に入り清涼山を訪れた。山には曼殊大聖の塑像があり、その国の人は伝えて、「帝釈天が工匠を連れて来て掘ったものである」と言う。慈蔵は塑像の前で秘密な感応があることを祈った。夢に、塑像は(彼の)頭を撫で梵語の偈を授けた。目が覚めそれを解くことができなかったが、朝になって奇異な僧侶が来てそれを解釈してくれた。また、「たとえすべての教えを学んだとしてもこれより勝るものはないだろう」と言い、さらに袈裟・舍利等を渡して見えなくなった。(卷四「義解」：「慈蔵定律」3)

以上の四箇条の説話はいずれも、仏教の神々の属で数えられる観音菩薩と文殊菩薩とが、“夢”を借りて人間と交わりをなしている。卷三「塔像」：「三所観音・衆生寺」1の説話と卷三「塔像」：「三所観音・衆生寺」2の説話とは、同じ箇条での二つの出来事で、ともに話しの展開のモチーフに“夢”が用いられている。前者は衆生寺の靈験あらたかな観音菩薩像を作った職人は本来中国人で、彼が新羅へ渡る前、本国の中国で経験した観音菩薩の自分の命救いが夢をモチーフに物語られ、そして後者はその職人の作った観音菩薩像を奉って

いた性泰の危難からの救いが夢をモチーフに物語られている。卷三「塔像」：「台山五万真身」の説話と卷四「義解」：「慈蔵定律」3の説話とは、新羅の大僧侶であった法師慈蔵が仏法を求めて唐に留学していた時、夢の中で五台山の文殊菩薩にまみえ梵語の偈を授けられたということが異なる箇条でそれぞれ物語られている。

3)、真人・天人との交わりの場合

これより先に寺に一老僧がいた。突然真人が石塔の東南の岡の上に座り、西に向かって大衆のために説法をしていることを夢に見、この土地は必ず仏法の住処となる土地であると考えたが、心にそのことを秘めておき他人には言わなかった。岩石が切り立って険しく、谷の流れがとても激しい。職人たちは顧みなく皆はよくないと言った。僻地に及んで仏殿が建てられる平坦な地を得たが、完全に神霊な基盤である。見るもの皆が愕き、よい場所であると称賛した。近ごろ仏殿は壊れ落ち、寺だけが存在する。(卷三「塔像」：「鑿蔵寺弥陀殿」)

王が出家を許した。そこで(慈蔵は)岩や藪の地に深く隠れたが、食糧の粒のことは憂えなかった。時に奇異な鳥が果物をくわえて来て提供し、手に取って食べた。しばらくして夢に天人が来て五戒を授けた。その時始めて谷間を出て来、郷里の男女は争って来て戒を受けた。(卷四「義解」：「慈蔵定律」2)

以上の二箇条の説話はいずれも、仏教の神々の属で数えられる真人と天人とが、“夢”を借りて人間と交わりをなしている。卷三「塔像」：「鑿蔵寺弥陀殿」では、岩石が切り立って険しく谷の流れがとても激しいため皆が僻地であると考えられる場所で、真人が大衆に向かい説法している夢をみた老僧が、そこそ仏殿の建てられる良い土地であることをあらかじめ察知している。卷四「義解」：「慈蔵定律」2では、仏法を求め世の榮達を棄て出家したばかりの法師慈蔵が、夢の中で天人から五戒を授けられ、それから始めて俗世間の人への救済を行っている。

4)、僧侶との交わりの場合

善徳王(新羅第二十七代：632-647)の時、僧侶の生義は道中寺に常住していた。ある僧が(彼を)引っぱって南山に上ってゆき、草を結んで道標をつくらせ、山の南の洞窟に至ってから、「わたしはここに埋まっている。どうか師がそれを掘り出し、嶺の上に安置してください」という夢を見た。目が覚めてから、友人とその道標を尋ねて洞窟の地につき、石の弥勒像を掘り出し三花嶺の上に安置した。(卷三「塔像」：「生義寺石弥勒」)

大中十二年戊寅(858)二月十五日の夜の夢に、昔会った僧侶が窓辺に来、「昔明州の開国寺におりました時、師との約束があり許諾されたと思っていましたがどうしてこのよう

に遅くなるのでしょ」と言った。祖師は驚き目が覚め、数十人を強制して翼嶺の地域につきその住まいを尋ねてまわった。一人の女が洛山の下の村に住んでいたが、その名前を尋ねると「徳者」と言い、女には年やと八才になる一人っ子がいた。(その子は)いつも村の南の石橋の辺りで遊ぶが、その母に告げて、「わたしと一緒に遊ぶものの中に金色童子がいる」と言ったのを、母は師に報告した。師は驚き喜び、その子とともにその子の遊んだ橋の下を尋ねた。水中には一つの石仏があり、それを担ぎだした。左の耳は切断されており、前を見た僧侶と似ていた。つまり正趣菩薩の像である。ここでふだを作りその構成の土地を占ったが、洛山の上が吉であることで仏殿三間を作りその像を安置した。(巻三「塔像」：「洛山二大聖：観音・正趣、調信」1)

真智王(新羅第二十五代：576-579)の代に及んで、興輪寺の僧である真慈がいつも堂の主人である弥勒像の前に進み願掛けし誓って言った。「願わくはわが大聖が花郎に化身し、現世に出現しますように。わたしはいつもあなたに親しく付き添い、周りの世話をし、差し上げます」と。その誠意と懇意のこもった祈禱は日々篤くなっていた。ある夜の夢に一人の僧が、「あなたが熊川の水源寺に行けば弥勒仙花に会えるでしょう」と言った。真慈は目が覚め驚き喜び、その寺を尋ね十日の道のりを一歩一礼の思いで歩いた。その寺に着くと門外にいい加減に美しい一人の少年がいて、美しい風姿で出迎え小さい門のほうに引き入れ客室のほうに迎え入れた。真慈は歩いたり挨拶したりしながら、「あなたは素から普段のわたしを知らないのにどうしてこのようにも丁寧接待するのですか」と聞いた。少年は、「わたしも京師の人です。師が遠くまで来られることで慰問に来たまでです」と言う。しばらくした後(その少年は)門を出て所在がわからなくなったが、真慈は偶然だろうと思い特別に奇異であるとは思わなかった。ただし寺の僧にこの前の夢と自分のそこに来た理由を述べ、また「しばらく下の腰掛けに座り、弥勒仙花を待とうとするがかまいませんか」と聞いた。寺の僧は彼の精神がおかしいだろうと疑ったが、彼の丁寧で懇切なのを見たので、「ここから南のほうには千山があり、昔から賢哲の人々が寓居し不思議な感化があると言われます。そこに行って寓居するのはどうでしょう」と言った。真慈はそれに従い、その山の麓に行った。山の霊が老人に変身し出迎え、「ここに来たのは何のようで」と尋ねる。答えて、「弥勒仙花に会いたいです」と。老人は、「しばらく前、水源寺の門外で弥勒仙花とすでに会っておいて、さらに何を求めに来たのだ」と言った。真慈はそれを聞いて驚き、汗をかきながら本の寺に飛んで帰った。(巻三「塔像」：「弥勒仙花・未尸郎・真慈師」)

以上の三箇条の説話はいずれも、僧侶が“夢”を借りて人間と交わりをなしている。巻三「塔像」：「生義寺石弥勒」では、道中寺の僧侶の生義の夢に、ある僧侶が現れ南山の洞窟に埋まっている自分を移動安置してくれるよう頼んでおり、巻三「塔像」：「洛山二大聖：観音・正趣、調信」1では、岨山寺の祖師梵日の夢に、昔明州の開国寺で会った僧侶が窓辺

に來、自分の家を建ててくれるという昔明州の開国寺にいた時の約束を守ってくれるよう声をかける。そして卷三「塔像」：「弥勒仙花・未尸郎・真慈師」では、興輪寺の僧である真慈がいつも弥勒像の前に願掛けをし、「どうかあなたが花郎に化身し現世に出現しますように」と誠意と懇意のこもった祈禱が篤くなっていたある夜の彼の夢に、一人の僧侶が、「熊川の水源寺に行けば弥勒仙花（花郎）に会えるでしょう」と諭してくれる。しかし、これらの説話の前者二つでは、夢の中で人間と交わりをなしている僧侶は生身の人間の僧侶ではなく、それぞれ仏教の神々の属で数えられる存在の変身像である。¹²⁾ 卷三「塔像」：「生義寺石弥勒」でのある僧侶が石の弥勒像の変身であることは、生義がその僧侶の示した洞窟に行きその地を掘って見て確認されているし、卷三「塔像」：「洛山二大聖：観音・正趣、調信」1での昔明州の開国寺で会った僧侶が一石仏の変身であることは、祖師梵日がその僧侶の示した住まいを尋ねると、それは水中の一石仏が夢で見た僧侶の姿のままであったことから確認されている。つまり、これら二つの説話で夢に現れている僧侶の実体は僧侶の姿で活動した石仏であったことが明確である。これは僧侶の存在が仏の存在と同様に認識されていたことを示し、仏は自由自在に変身できることさえも示している。

さて、以上のこれらの説話は、夢を借りて人間と交わりをなしている仏教の神々の姿は異なるものの、その交わりが行われる内容は仏教の經典の説く仏の靈験や功德を語る仏教説話の典型の範疇に属している。第一、廃墟された仏の移動安置を願うものが二箇条（卷三「塔像」：「生義寺石弥勒」、卷三「塔像」：「洛山二大聖：観音・正趣、調信」1）、第二、仏が陰での助けをなしたり、請願を成就させているのが四箇条（卷三「塔像」：「三所観音・衆生寺」1、卷三「塔像」：「三所観音・衆生寺」2、卷三「塔像」：「鑿藏寺弥陀殿」、卷三「塔像」：「弥勒仙花・未尸郎・真慈師」）、第三、僧侶の修道を激励するのが四箇条、（卷三「塔像」：「南白月二聖：努朕夫得・怛怛朴朴」、卷三「塔像」：「台山五万真身」、卷四「義解」：「慈藏定律」3、卷四「義解」：「慈藏定律」2）などである。

3、現夢

現夢とは夢の中でこの世の未来の出来事に対する兆候、或いは象徴が示される夢を言う。

卷一「紀異」：「太宗春秋公」

卷二「紀異」：「元聖大王」

卷三「塔像」：「黄竜寺九層塔」

卷四「義解」：「義湘伝教」

以前、文姫の姉である宝姫が、西岳に登り尿をしたら京城一杯になってしまう夢を見た。朝になって妹に夢を語ると、文姫はそれを聞き、「わたしがその夢を買います」と言う。姉

は、「何をくれる」と。「錦の着物をもって買うなら良いでしょうか」。姉は、「良いよ」と言う。妹はその夢を受けようとスカートの裾を開き、姉は、「昨日の夢をあなたのものにする」と言った。妹は錦の着物でその代価とした。その後十日あまり、庚信は春秋公と、正月の午忌日に庚信の家の前で蹴鞠をし、わざと春秋の袴を踏みつけその裾の紐を破った。それから、「私の家に行ってそれを縫いましょう」と誘う。公は彼に従った。庚信は（妹の）阿海（宝姫）に針仕事をするように命じたが、阿海は、「どうしてそのような些細なことで軽々しく貴公子に近づけましょうか」と言い、それを辞退した。それで阿之（文姫）に命じた。公は庚信の意向を知り、遂に彼女を可愛がり、それからたびたび往来した。庚信は阿之が妊娠しているのを知り、そこで彼女を責め、「おまえは父母に報告もなしに妊娠しているとは何事か」と言い、その妹を焼き殺すと国中に宣言した。ある日、善徳王が南山に遊幸するのを待ち、庭の中に薪を積み火を焚くと煙が起きあがる。王はそれを観て何の煙であるかを尋ね、左右の者は、「たぶん庚信が妹を焼き殺すものでありましょう」と上奏する。王がその所以を尋ねると、「その妹が夫なしに妊娠したためです」と言う。王は、「誰がそうしたんだ」と尋ねると、その時公は（王の）近くで仕えていてその手前にいたが、顔色が大いに変わっていた。王は、「お前がやったのだな。速く行って彼女を救いなさい」と言った。公はその命令を受け馬を馳せてゆき、やめるように伝えた。その後すぐ婚礼を行い、真徳王が亡くなったことで、（春秋公は）永徽五年甲寅（654）に即位した。国を治めること八年にして、竜朔元年辛酉（661）に亡くなる。五十九才であった。哀公寺の東に葬り、碑石がある。王は庚信と深謀と強力で三韓を統一し、国家の存立に大きな功績がある。そのために廟号が太宗である。太子の法敏、角干仁間、角干文王、角干老且、角干智鏡、角干愷元等は皆、文姫の生んだものである。当時夢を買った徴候がここに現れる。（巻一「紀異」：「太宗春秋公」）

伊尹である金周元が始め上宰（第一番目の宰相）となり、（元聖）王（新羅第三十八代：785-798）は角干として第二番目の宰相の座にいた。（彼は）幘頭（頭を包む布）を脱ぎ、白い笠を被り、十二弦の琴を持ち、天官寺の井戸の中に入る夢を見た。目が覚め人にそれを占ってもらったが、「幘頭を脱ぐことは職を失う兆しで、琴を持つことは笠を被る兆しで、井戸の中に入ることは獄に入る兆しである」と言った。王はこれを聞きとても思い、門を閉ざして出ていかなかった。この時阿殄の余三が来て謁見を申し入れたが、王は病気だと言い出ていかなかった。またもや申し入れ、「どうか一目お会いできますように」と言ったので、王は許諾した。阿殄は、「公の気にしていることは何のことですか」と聞いた。王は占夢の経緯を全部話した。阿殄は立ち上がって拝礼をし、「これは吉祥の夢ではございませんか。公がもし大位に登りわたしを見捨てないとするならば、公のためにこれを解き明かしましょう」と言う。王がそこで左右の人を退け、それを解き明かすことを願った。「幘頭を脱ぐことは人が上にいないことです。白い笠を被ることは王冠の兆しです。十二弦の琴

を持つことは(奈勿王の)十二代目の孫が王位を嗣ぐ兆しです。天官寺の井戸の中に入ることには宮廷に入ることの祥瑞であります」と言った。王は、「上に周元がいるのに、どうやって上位に就くことができる」と聞く。「どうぞ密かに北川の神に祭りをすればいいでしょう」。(王は)これに従った。暫くして宣徳王が崩御し、国の人々は周元を奉り王にしようとした。ちょうど宮廷に迎え入れようとする時、家が川の北にあって急に川が漲り渡れなかった。元聖王が先に宮廷に入り位に就いた。上宰の仲間が皆来て従い、新たに君臨した王に拝礼し祝賀した。これが元聖大王で、諱が敬信の金氏である。おおむね吉夢が当たったのである。(巻二「紀異」：「元聖大王」)

貞観十七年癸卯(643)十六日、(慈蔵法師は)唐の皇帝の賜った經典・仏像・袈裟・幣帛を持って国に帰え、塔を建立することを王に聞かせた。善徳王は群臣と討議したが、群臣は、「百済に工匠を願ってこそ建立できましよう」と言う。それで財宝と幣帛で百済に願った。阿非知と名づく工匠が命を受けて来、木材と石材とを経営し、伊干の竜春が幹事となり下の工匠二百人を率いた。初めて塔の柱を立てる日、工匠は本国の百済が滅亡する形状の夢を見た。工匠はそこで心の密かに(塔の建立を)やめるべきかとためらっていたが、突然大地が振動し薄暗い中で、一人の老僧と一人の壮士が金殿門から出た。そしてその柱を立て、僧と壮士は隠れて見えなくなった。工匠はここで後悔しその塔を建立し終えた。(巻三「塔像」：「黄竜寺九層塔」)

しばらくして終南山の至相寺に往き智儼を謁見した。儼は前の夜、一株の大きな樹木が海東(朝鮮半島)に生じ、その枝葉があまねく布かれ陰は中国にまで及んだ。上には鳳凰の巢があり、登ってそれを見ると一個の摩尼宝珠があつて遠くまで光り輝いている夢を見た。目が覚め驚き神秘に思い、掃除をして待っていた。義湘が至ると特別な礼遇で迎えいれ静かに、「わたしの昨日の夢はあなたが来てわたしにたよる兆しであった」と言い、入室を許した。(巻四「義解」：「義湘伝教」)

以上四箇条の説話はいずれも現夢の内容を持つ。巻一「紀異」：「太宗春秋公」では、姉である宝姫が見た夢—西岳に登り尿をしたら京城一杯になった—を、朝になって妹である文姫が錦の着物を代価に払って買う。その後の文姫は太宗の王妃となり。太子法敏、角干仁間、角干文王、角干老且、角干智鏡、角干愷元等の母となるが、これは当時夢を買った徴候がここに現れたものであるとする。巻二「紀異」：「元聖大王」では、新羅第三十七代の宣徳王が崩御し、国の人々は上宰である金周元を奉り王にしようとした。しかしちょうど周元を宮廷に迎え入れようとした時、急に慶州の北の川が漲り、川の北に家があった周元はその川を渡ることができなかつたため、第二番目の宰相の座にいた元聖王が先に宮廷に入り位に就いている。このような出来事の生じる所以は、元聖王が自分の見た夢—幘頭を脱

ぎ、白い笠を被り、十二弦の琴を持ち、天官寺の井戸の中に入る——を、阿殮の余三から解いてもらい、当時元聖王より上の座にいる周元に先だって王位に就くためには密かに北川の神に祭りをすれば良いという余三の助言に従ったためである。そしてこれは元聖王の見た吉夢が当たったものであるとする。卷三「塔像」：「黄竜寺九層塔」では、慈蔵法師が黄竜寺に塔を建立することを善徳王に聞かせ、善徳王が群臣と討議し財宝と幣帛で百済から阿非知と名づく工匠を招き、木材と石材とを経営させる。始めて塔の柱を立てる日、工匠は自分の見た夢——本国の百済が滅亡する——で、心の密かに塔の建立をやめるべきかとためらっていたが、突然大地が振動し薄暗い中で一人の老僧と一人の壮士が金殿門から出、その柱を立ててから隠れて見えなくなった。工匠はここで後悔し、その塔を建立し終えたとする。卷四「義解」：「義湘伝教」では、中国の終南山の至相寺の高僧智儼が、ある夜見た夢——一株の大きな樹木が海東に生じ、その枝葉の陰が中国にまで及び、上には鳳凰の巢があつて登って見ると一個の摩尼宝珠があつて遠くまで光り輝いている——から目が覚め、それを神秘に思い掃除をして待っていたところで義湘に至る。彼は特別な礼遇で義湘を迎え入れ、自分の昨日の夢は義湘が来てたよる兆しであつたと言ひ入室を許したとする。

さて、これらの現夢の説話から当時の人々の現夢に関する認識の幾つの特徴を纏めてみる事ができる。

第一、現夢の内容には、良い出来事が予見される吉夢と悪い出来事が予見される凶夢とがあることである。卷一「紀異」：「太宗春秋公」での宝姫の見た夢——西岳に登り尿をしたら京城一杯になった——、そして卷二「紀異」：「元聖大王」での、元聖王の見た夢——幘頭を脱ぎ、白い笠を被り、十二弦の琴を持ち、天官寺の井戸の中に入る——などは結果から見て紛れもない吉夢であり、卷四「義解」：「義湘伝教」での智儼の見た夢——一株の大きな樹木が海東に生じ、その枝葉の陰が中国にまで及び、上には鳳凰の巢があつたが登って見ると一個の摩尼宝珠があつて遠くまで光り輝いている——もいわば吉夢として数えられよう。ところが、卷三「塔像」：「黄竜寺九層塔」での工匠の阿非知の見た夢——本国の百済が滅亡する——は凶夢なのである。

第二、現夢の内容には、吉凶に関する判断が曖昧で吉夢と凶夢の区別がすぐに判断できないものがあり、そのために夢を解く慣習（占夢）があつたことである。卷一「紀異」：「太宗春秋公」では、宝姫の見た夢——西岳に登り尿をしたら京城一杯になった——が後の出来事から見て貴人となる予見性を秘めた吉夢であつたことが判るが、それが何を意味するものか普通の人には知る余地がない。それは宝姫が自分の見たそのような吉夢を妹の文姫に売り渡すことから明らかである。もしかして宝姫がその夢の意味するところをしっかりと心得ていたならばそれを妹に錦の着物一着くらいで売り飛ばすようなことはしなかつたであろう。卷二「紀異」：「元聖大王」では、元聖王は自分の見た夢——幘頭を脱ぎ、白い笠を被り、十二弦の琴を持ち、天官寺の井戸の中に入る——の意味するところが何かを知らなかつた

め、目が覚めてからそれを人に占ってもらっている。ところがその占い師は、「幘頭を脱ぐことは職を失う兆しで、琴を持つことは笠を被る兆しで、井戸の中に入ることは獄に入る兆しである」とそれが凶夢であると解き、これを聞いた王はとても悪い門を閉ざして外出もしなく、そして人が謁見を申し入れても会おうとしない有様である。その時、阿殄の余三の「どうか一目お会いできますように」との再三の謁見の申し入れに、王はやっと許諾し占夢の経緯を全部話す。すると阿殄は立ち上がって拝礼をし、「これは吉祥の夢ではございませんか。公がもし大位に登りわたしを見捨てないとするならば、公のためにこれを解き明かしましょう」と。そこで王が左右の人を退け、それを解き明かすことを願えば、「幘頭を脱ぐことは人が上にいないこと、白い笠を被ることは王冠の兆し、十二弦の琴を持つことは(奈勿王の)十二代目の孫が王位を嗣ぐ兆し、天官寺の井戸の中に入ることは宮廷に入ることの祥瑞」とそれが吉夢であると解く。後の出来事から見て元聖王の見た夢は吉夢で、余三のした解釈が正しかったことが判るが、いずれにせよこれは夢が未来の出来事に対する予見性を持つものでありながら、さらに“夢”自体が曖昧性を秘めた不可知のものであることで、それを解く占夢の慣習があったことを物語っている。そしてそのような不可知の夢であってもその意味するところを読み解く人は存在する。巻一「紀異」：「太宗春秋公」での宝姫の見た夢を錦の着物で買い取る文姫がその人物であり、巻二「紀異」：「元聖大王」での元聖王の見た夢を正しく読み解く余三がそのような人物である。そして、巻三「塔像」：「黄竜寺九層塔」での工匠の阿非知、巻四「義解」：「義湘伝教」での高僧の智儼も自分の見た夢を心の中でしっかり受け止めているのである。

第三、予見性に富む夢を売買することでその夢の未来性を自分のものにすることができ、あるいは夢からの示唆でその夢の未来性を助長することも可能である。巻一「紀異」：「太宗春秋公」で、文姫が姉の宝姫の見た夢を錦の着物で買い取ることで後王妃となることが前者に当たり、巻二「紀異」：「元聖大王」で、元聖王が自分より上座についている周元を退けてみずから次代の王となるため、密かに北川の神にお祭りをする事で成功を納めることが後者に当たる。

4、胎夢

胎夢とは夢の中でこの世に生まれる子に対する兆候・象徴となることが示される夢を言う。

巻一「紀異」：「金庾信」

巻二「紀異」：「孝昭王代竹旨郎」

巻四「義解」：「慈藏定律」1

巻四「義解」：「元曉不羈」

巻五「神呪」：「明朗神印」

そこで一匹の鼠を箱の中に隠し、それが何であるかを尋ねた。その人（楸南）は上奏して、「これは他でもない鼠で、その命は八つあります」と答えた。そこで失言であると思われ、ちょうど斬罪を加えようとした時、その人は誓いを起てて、「私は死んだ後、大將軍となって高句麗を滅ぼそう」と言った。彼を斬首してから鼠の腹を切って中を見ると、その命が七つあった。それで彼の前の言葉が当たっていたことを知った。その日の夜の大王（高句麗の宝蔵王）の夢に、楸南が新羅の舒玄公の婦人の懐に入ったので、（王はそれを）群臣に告げた。皆は、「楸南は心に誓いを建てて死にました。それが果たしてその通りになったのです」と言った。だからわたしを遣い、此処に来て何とかするようにさせたわけである」と言った。（巻一「紀異」：「金庾信」）

（述宗）公が任地について一ヶ月になった。夢に居士が部屋の中に入ってくるのを見たが、奥方も同じ夢を見たのもっと驚き不思議に思った。翌日、人を使わしてその居士の安否を問うと、人々は、「その居士は死んで何日か経っています」と言った。使いが戻って来その死を報告したが、（居士の死んだ日は）夢と同じ日であった。公が、「おそらく居士は我が家に誕生するであろう」と言い、さらに軍卒を動員して彼を（竹旨）嶺の北の峯に葬り、石の弥勒一体を作り塚の前に安置した。奥方は夢を見た日から妊娠し、誕生に及びそれによって竹旨と名づけた。（巻二「紀異」：「孝昭王代竹旨郎」）

大徳である慈蔵は金氏である。本は辰韓の真骨の蘇判の茂林の息子である。¹³⁾その父は清廉に要職を歴任した人だが、その後継ぎがいなかった。それで仏教に心を帰依し、千部観音に詣で一子息を生むことを願い、「もし男子を生めば、喜捨し法海の橋渡しにいたします（僧侶にする）」と祈った。母は突然星が落ち懐に入る夢を見て妊娠した。（巻四「義解」：「慈蔵定律」1）

初め母は流星が懐に入る夢を見て妊娠した。（巻四「義解」：「元曉不羈」）

初め母は青色の珠を飲み込む夢を見て妊娠した。（巻五「神呪」：「明朗神印」）

以上五箇条の説話はいずれも胎夢の内容を持つ。巻一「紀異」：「金庾信」では、高句麗の宝蔵王（第二十八代：642－668）が卜筮の師である楸南を失言の罪で殺した夜、死んだ彼が新羅の舒玄公の婦人の懐に入るのを見る。そのことを王が群臣に告げれば、臣下の皆は、「楸南は心に誓いを建てて死にました。それが果たしてその通りになったのです」と答えたとする。巻二「紀異」：「孝昭王代竹旨郎」では、朔州の都督となった述宗公が任地について一ヶ月になった時、夢に朔州に来る途中の竹旨峰で出会った居士が部屋に入ってくるのを見、奥方も同じ夢を見たのもっと驚き不思議に思った。翌日、人を使わして居士

の安否を問うと、その居士は死んで何日か経っているとのこと。使いが戻って来その死を報告したが、居士の死んだ日は述宗公夫妻が彼の夢を見た日とちょうど同じ日で、奥方は夢を見たその日から妊娠した。そしてその子の誕生に及んでは、その夢に因って竹旨と名づけたとする。卷四「義解」：「慈蔵定律」1では、慈蔵の父である辰韓の真骨の蘇判の金茂林は清廉に要職を歴任した人だが、後継ぎがいなかったため仏教に心を帰依し千部観音に詣で一子息を生むことを願い、「もし男子を生めば、喜捨し僧侶にします」と祈った。そして母は突然星が落ち懐に入る夢を見て妊娠したとする。卷四「義解」：「元曉不羈」では、元曉の母は流星が懐に入る夢を見て元曉を妊娠したとする。卷五「神呪」：「明朗神印」では、明朗の母は青色の珠を飲み込む夢を見て明朗を妊娠したとする。

さて、これらの胎夢の説話からは、転生の事実が語られるもの（卷一「紀異」：「金庚信」、卷二「紀異」：「孝昭王代竹旨郎」と母親が星・珠などの夢を見て懐妊するもの（卷四「義解」：「慈蔵定律」1、卷四「義解」：「元曉不羈」、卷五「神呪」：「明朗神印」とがある。そして転生の事実が語られる胎夢は世の人の縁起によって人から人へと、死んだその瞬間に、次の新たな生命へと転生談に連結しており、星・珠などの夢を見て懐妊するという種の胎夢は主に高名な僧侶の誕生談に連結していることが確認できる。

5、その他

【三国遺事】の夢の説話の中には、上に示した系統的な分類の中に入れることのできないものが二箇条ある。

卷三「塔像」：「洛山二大聖：観音・正趣、調信」2

卷五「感通」：「郁面婢念仏西昇」1

昔新羅が都を経営していた時、世達寺の荘園の官舎が溟州の榛李郡にあったが、本寺は僧侶の調信を止め知莊（荘園の役人）とした。調信は荘園に到着してから太守の金昕公の娘が好きになった。その困惑ぶりは深刻で、たびたび洛山の大悲の前に行き密かに僮倖があるように祈った。そうすること数年間、その娘はすでに配偶者が定まってしまった。

（調信は）また堂の前に行き、大悲の自分の意を成就してくれなかったことを怨み一日中悲しみ泣いた。精神は疲れ果てしばらくうとうとしたが、突然夢に金氏の娘がゆったりと門に入り、なんと清々しく微笑みながら、「わたしはあなた様をちょっとした顔見知りで存じ上げ、心から愛しておりしばしの間も忘れることはありませんでした。父母の命令に従って仕方なく他人に従ったわけです。今は夫婦となることを願ってここに來たのです」と言う。調信はそれでとても喜び一緒にふるさとに帰って行き四十年の歳月の間生計をともにした。子供が五人いたが、家はただ四方の壁しかなく、粗末な食物も工面できずについては落ちぶ

れ手を携え四方に食物を乞って生き延びていた。このようなことが十年、田舎を巡り歩き、破れた衣は縫い込みだらけで体を覆うことさえできなかった。ちょうど溟州の蟹嶺の嶺を越える時十五才の長男が突然餓死し、慟哭しながら道端に死体を修めた。後の残り四人を従え羽曲県につき道端に茅葺きの家を造り住んだ。夫婦は老いまた病気もありそして飢えて起きあがることができなかった。十才の女の子が物乞いをしたが、また村の猛犬に咬まれ痛いと呼びながら前に倒れていた。父母はこのためにすすり泣き、数行の涙をこぼすだけであった。婦人はそこで立ち止まって涙を拭い突然、「わたしが始め君にあった時分は、見た目も美しく年も若く衣服もみな新しかった。一口の美食もあなたとそれを分かち得、数尺の暖もあなたとそれをともしました。家を出て五十年、愛しい感情はその上なく恩愛は芳しいばかりで、これを深い縁と言うでしょう。しかしこの何年からは衰弱と病魔が日々深まり、飢えと寒さが日々迫ってきます。間借りの住まいも少しの飲み物も人は乞うことを許せず、この家あの家に寄る恥は岡山を背負ったかのように気が重いです。子供が寒く飢えていても、さしあたってどうにか補えることもできない。何の暇に夫婦の心を悦ぶことがあります。美しい顔の色気ある微笑みも草の上の露のようなもの、芝蘭の香りのような約束も柳のわたが風に飛ぶようなものです。君にはわたしがいて患いとなり、わたしには君がいて憂いとなる。つくづく考えて見れば、昔日の歓びとはちょうど憂いと患いとのおきかけだったのです。君とわたしがどうしてこのような落ちぶれになってしまったのでしょうか。一群の鳥が一緒に飢えていると、どうして一羽の鸞が鏡に映ることがわかるでしょう。貧困であれば捨て去り、裕福であれば連れ合うことは人情の耐え難いところである。しかし行くも止むるも人間の思いのままではなく、離合にも運命がある。どうかこの言葉に従うことにしましょう」と言った。調信はこれを聞いて大いに喜んで、それぞれ二児ずつ分担して別れようとした時女は、「わたしは故郷に向かいます。君はその南のほうに向かってください」と言った。ちょうど別れて道を進もうとするところで目が覚めた。薄い灯火が翳っており、夜の色が闇(たけなわ)になろうとする。

朝になったら髭や髪の毛がみな白く、方々として何も人間の世に対する意欲はなかった。すでに苦勞だらけの命を厭うのは百年の辛苦に厭きたようで、貪欲色事の心は氷の溶けるようにきれいになった。ここにおいて大悲の聖像にまみえることが恥ずかしくなり懺悔する心を持ち止まなかった。帰って行き蟹嶺の嶺に埋めた子供を取り出すとそれは弥勒仏であった。水で洗い近隣の寺に奉安した。都に戻り、知莊の任務から退き、自分の財産を出しつくし浄土寺を創立し善業を修めるよう勤めていたが、後はどうなったかを知れない。(巻三「塔像」：「洛山二大聖：観音・正趣、調信」2)

棟梁の八珍というものは観音の化身である。信徒を集めて一千人、その輩を二つに分け、一は勞力・他の一は精修とした。その勞力の中に物好きの人間が仏戒を受けず畜生の道に落ち、浮石寺の牛になった。前に仏教の經典を背負い運んだことでその經典の力に頼り、転生

して阿干貴珍の家の下女となったが郁面という名である。用事で下柯山につき、夢に感応し遂に道心を起こした。(巻五「感通」：「郁面婢念仏西昇」1)

以上二箇条の説話の一つ目は、現世の現在の自分としては叶えられない女性への恋の願望が、夢の中で叶えられている本物の夢物語で、その二つ目は、夢に感応したとの記事だけあってその夢の内容は具体的に示されていない。だからこの二つ目の説話においては、その見た夢の内容がどうであったか、貴珍の家の下女である郁面が感動して仏教に帰依することが決心できそうな夢を、話しの前後関係から想像してみる以外には方法がないが、一つ目の説話で描かれている夢は、上で今まで論じてきた夢とは性質を異にするものとして解釈できる。つまりここでの夢は、単なる他界との交通場としての役割ではなく、そして未来の出来事を予見するものとしての現夢でもなく、新たに生まれてくる生命に対する兆候・象徴としての胎夢でもないもので、普通の夢物語でありながら、その表現においても、主張においても人生に対しての強い示唆性を含んでいる文学作品であると感ぜずにはいられない。そのため、この作品については新たな機会にその作品性を追求してみることにする。

以上でもって、『三国遺事』に載っている“夢”を話しの展開のモチーフにしている説話を取り上げ、当時の人々が“夢”をどのように認識していたかを確認してきた。

注

- 注1、『三国遺事』の各巻の内、それぞれの題名で分けている記事を一箇条と数え、その記事の中の各々の纏まりを見せるパートを説話としている。そして一箇条の中の各々の説話は、本文で描写されている順に番号をつけている。
- 注2、蒸した棗：「晏子」で、蒸棗があるとされたのは東海で、そのここでの引用は朝鮮を指すためのものと解釈する。
- 【晏子】：景公謂晏子曰、東海之中、有水而赤。其中有棗、華而不実、何也。晏子曰、昔者、秦繆公、乘赤竜治天下、以黄布裏蒸棗、而投其布故水赤、蒸棗故花而不実。公曰、吾佯問。対曰、嬰聞佯問者、佯対之。
- 注3、仙境にある桃：つまり仙境自体を意味する。
- 注4、仏教で、善財童子があまねく五十三善知識に参して始めて善果を得たという故事に由来する五十三参。最初に文殊に参し最後に普賢に参したが、その間菩薩・仏母・比丘・比丘尼・優婆塞・天神・地神・主夜神・王者・城主・長者・居士・童子・天女・童女・外道・婆羅門等について一々参問した。【華嚴経】：「入法界品」。
- 注5、仏教で、声聞・縁覚・菩薩・仏の聖者の人衆を言う。
- 注6、仏教で、座禅で精神を統一し静かに真理を考える境地に入ること。
- 注7、仏の三十二相の一。額にあつて光を發し無量の国土を照らすという毛。
- 【法華経】：「序品」：爾時、仏教眉間白毫相光。
- 注8、仏教で、真理を悟った人。阿羅漢または仏をいう。
- 【中本起経】：修徳履道、忽榮棄利、義曰真人。
- 注9、仏教で、五戒を遵奉をした人が死後再び生まれる正理の世界、天上界にいる人。または正しい人間界にいる人。
- 注10、仏教の四種の供養：飲食・衣服・臥具・湯薬。
- 【祖庭事苑】：四事、飲食、衣服、臥具、湯薬。
- 注11、仏の徳をたたえた韻文体の経文で、三字あるいは七字一句のもの。四句を一偈とする。
- 注12、卷三「塔像」：「弥勒仙花・未戸郎・真慈師」においての、興輪寺の僧である真慈が、「弥勒が花郎に化身し現世に出現しますように」と弥勒像の前で願掛けをし、その祈祷が篤い時期のある夜の彼の夢に、「熊川の水源寺に行けば弥勒仙花に会えるでしょう」と諭してくれた一人の僧侶が現れるが、その僧侶もまた、たぶん弥勒の変身像であると思われる。
- 注13、実際の蘇判の茂林には娘が一人いて明朗の母となるのだが、後継ぎはないこととされている。
- 注14、トは亀の甲を焼く、筮は筮竹（めとぎ）を用いて占う。